

---

# 嫌疑刑の量刑判断

山雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嫌疑刑の量刑判断

### 【Nコード】

N1963F

### 【作者名】

山雄

### 【あらすじ】

判決を下すは岡崎智広。陪審員が並び、証人も揃った。・・・さあ、審判への障害はもはや僅か。不明なるは、誰が何を犯したかのみ。その、ささいな不確定事項はもう言い訳にすらならない。時が、家族が、仲間が、なにより彼自身が、岡崎智広の裁断を待っていた。彼が下す罪はいかに？彼がみなす罪びとは誰か？恋人、残された家族、越してきた隣人、尊敬と嫌悪の対象者、心地よい友人、無邪気な後輩・・・様々な人の中で、生きて葛藤する岡崎智広を中心にした物語。シリアス脚本によるコメディ劇。そんなお話を楽しんでい

ただけたら幸いです。

第一話 「・・・なんにしても、今から彼は家に帰らなければなりません」

【嫌疑刑】・・・16世紀のドイツで制定された刑法上の一制度で、有罪の証明はないが、無罪の証明もないという場合科される刑罰のこと。

第一話 「・・・なんにしても、今から彼は家に帰らなければなりません」

その日は代表である藤本恭治が出張で不在であつたこともあつて、オフィス内はいつも以上に激務によつて忙殺されていた。正社員ではない岡崎智広にとつてもそれは同様であり、現在はデータのチェックや書類のレビューなどといった仕事をしている。仕事ができるという点に至上の価値をおく智広にとって、仕事上の疲れは特に負担とはならなかつた。もともと、気質的に疲れを厭わない人間でもある。

藤本商事は中小企業向け融資を主業務とする小さな金融会社であつた。従業員は唯一の学生である智広を含めても14人しかない。雇用規模から見れば、中小企業の中でも小規模なほうであろう。しかし、経済規模でいえば藤本商事は決して小さいとはいえなかつた。資本金は約12億円もあり、なりよりもその株式を公開していない。元手となる資金を外部に頼らず、全ての株式を代表が独占しているという稀有な会社である。実際に融資を行っている会社の数こそ少ないが、この会社に融資を希望する中小企業は後を絶たなかつた。

そして、その審査のための作業量は従業員数に対して、あまりにも多いといえる。故に、常に神がかり的な仕事処理能力を有する恭治がいないと、今日みたいに夜9時を超えても終了の目処がつかないという状況が頻繁に生じてしまう。違いなく労働基準に引っかかつてしまっているといえるだろう。もっとも、智広としては雇用契約を結んだ覚えもない以上、それは当然であつたともいえる。

一度体を伸ばして筋肉をほぐすと、智広はちらりと時計を見た。9時30分という数字を確認して、再びパソコンに目を戻した時、

ノックもなくオフィスの扉がいきなり開いた。

「ともくん、いますよね？」

その声と共に部屋に入ってきたのは恭司の一人娘である藤本彩夏である。智広の席を人目確認すると、現在不在の恭治の代理を務める金島を睨みつけた。

「金島さん、お忙しいのはわかりますが、いつまで学生のとも君を拘束しているんですか？時間を見てください、時間を」

そう非難の声を向けられた金島は、へらへらと調子よく彼女に答えた。

「いやあ、お嬢さん。あたしゃあ、一言、言つといたんですけどねえ。なんでも、本人が仕事終わらないんで残るんでって」

金島の人相はもともと良くない。特に残忍そうな目元が強く印象に残る。智広も詳しくは知らないが、そのしゃべり方といい、おそらく以前はそつち系の人間であつたのだろう。この会社には恭治がそのようなところから集めてきた人間が結構いる。

その金島の機嫌を伺うかのような様子は、ただたんに凄まれる以上の迫力を感じさせる。しかし、そんな金島に対して、彩夏はまったく気にした風を見せなかった。

「では、量がおかしいでしょう。とも君が終わらないということはおもともと学生には無理な仕事量であつただけです。なんにしても、今から彼は家に帰らなければなりません。ともくん、いいよね？」

最後は智広に向けたものであつた。本当なら、なるべくノルマは終わらせたいと思つていたが、彼には経験上ここで彼女に逆らつても無駄だということは理解していた。故にそんな無用な時間の浪費はしないようにする。それは、この場にいるみんなもわかっているようで、それぞれに苦笑したり、智広と彩夏の関係を囁すかのよう

に口笛を吹いていたりしている。

「ええ、わかりました。10分ほどで支度しますので待つてもらえますか？では、そういうことですので、みなさんお先に失礼させていただきます」

その智広の声に応じて、テーブルのあちこちから返事の声が挙がった。

テーブルを手早く片付けて、荷物をまとめた後、従業員達に一声をかけてから智広と彩夏は共に夜の街を歩き出した。季節はもう桜の咲く季節であるとはいえ、この時間になれば空気はかなり冷たくなる。

「彩夏さん、どうもすみません。・・・しかし、それにしても事務所来るなんて珍しいですね。今日はどうしたんですか？」

「早く帰らせてくださいって、愛ちゃんから電話があったのよ。とも君、明日から始業式なんだって？」

彩夏が駄目だぞと表情で語っている。もともと、容姿がよく顔立ちが綺麗な彼女はその表情も豊かであった。もともと、それも誰に對するかによつて使い分けている節があつて、智広なんかは、実は腹黒い人だと認識している。

「愛が？それは嬉しいですね」

岡崎愛 妹からの電話があつたという知らせに対し、智広は嬉しそうに答えた。

「・・・喜んでいるところ悪いけど、とも君が家に帰ってバタバタされると眠れなくて困るっていつてたわよ？」

「いえいえ、それは照れ隠しですよ。」

にやけながらそう言う智広に対して、彩夏はため息混じりに文句を言った。智広本人が一番、自分の言葉を信じていないことは彼女も知るところである。

「まあ、どうでもいいけど。それよりも、別にいいじゃない、こういう連絡は、直接とも君の携帯にしてくれたら。おかげでこんな夜中を女の子一人歩く羽目になったんだよ？」

それを聞くと、智広は少し困ったような顔をした。

「・・・それは、確かに申し訳ないです。今度にでも、あいつには

彩夏さんに迷惑をかけるようなことをやめるように言っておきましょう」

「あつ、いえいえ、あの軽く冗談だったんで、そんなマジにへこまれてもしようがないんですけど・・・」

落ち込む智広に対して、彩夏は逆に困っていたように付け加える。その顔には苦笑の表情を浮かべていた。

「でも、やはり事務所のものはプライベートで使うわけにはいけませんよ。携帯が恭治さんから支給されている以上、やはり公私はわけないと。だから、あいつらに僕の携帯や事務所へ直接電話というのは許していません」

「・・・もう、とも君は堅すぎるよ。まあ、実際、今回もそんな迷惑でなかったからそれはいいんだよね。こんな役得もあるし」

そこで、突然彩夏は腕を智宏に絡ませてきた。それについては、いつものことと智宏は特に気にしない。彩夏の方も冗談のつもりだったらしく、すぐに体を離れた。そして、祖もまま動かず、少し深刻そうな表情で智宏を見つめている。智広も立ち止まり、彩夏の綺麗な顔に顔を向けた。

「あれ、どうかしました？」

「・・・ねえ、私、愛ちゃんと努君はやっぱ苦手なのかもしれない。やっぱり嫌われているみたいで、どうも会話が硬くなっちゃうんだ。まあ、仕方ないといえばそうかもしれないんだけどね。」

そう言って智広を見る彩夏は寂しそうな顔をしていた。実際いろいろと押さえている感情があるのだろう。その表情の中には寂しさと共に若干の罪悪感が含まれているように見受けられる。智広は心の中で少し慌てながらもそれを隠し、努めて明るく言い放った。

「あ、それは困りましたね。二人とも彩夏にとっては、将来の義兄弟ですのに。いっぺんに敵に回してしまいますと、嫁小姑戦争が起きたときに大変ですよ？」

「もう、とも君は・・・お姉さんそういう冗談はあまり好きじゃないからね」



少しだけ赤くなった顔を隠すように彩夏は前を向いて、すたすたと歩き始めた。智広はそれを楽しそうに見ていると、前で彩夏が振り返り、今度は少し怒ったように言う。

「なにしているの？せめて帰りぐらいいは送ってよ」

藤本商事のオフィスから彩夏の家に至るまでの道の途中に智広達の住むアパートはある。しかし、彩夏自身が希望したということ、もう10時を過ぎていること、そして何より女の子を一人で帰してはいけないという一般規範より智広は一旦藤本家まで向かうことになるだろう。

「とも君さあ、やっぱり君も愛ちゃんや努君とはあまり上手くないでないでしょ」

歩きながら彩夏が少し心配そうな声で聞いてきた。既に智広のアパートの近所まで来ている。智広はどうだろうと考える。努とは相変わらず会うごとに喧嘩するというような状況である。といっても努が一方的に智広に対して突っかかり、それを智広があしらうといった形であるが。一方、男女の差なのか、一年という歳の差なのかわからないが、愛とはそのようなことはない。しかし、だからといって一般家庭の兄弟における信頼関係が気づけているかどうかと考えると違うような気がする。

正直、彩夏が心配するまでもなく、智広は常に現在の岡崎家の異常性について考えてはいた。しかし、結局人というものには個人で生きるしかないだろうと結論付け、家庭について本気で心配する段階には至ってはいない。いつか、分かり合える日が来るかもしれないし、来なかったとしてもそれはそれでしょうがないと思っているのである。

しかし、この原因については彩夏にもまったく関係がないとは言えない。彼女を無駄に心配させる必要もないとは智広も思う。ま

してや、彼女に関係はあるが、責任はないのだから。

「他の人から見たらそうかもしれないですね。・・・でも、そうです。これが岡崎家の普通なんです。少年少女はだめな年長者と衝突し、そして反面教師にして成長していくんですから、それを実践しているにすぎませんよ」

結局、彼は2年年上の先輩に対して、彩夏がこれ以上心配することがないようにと願いながら、こう笑いかけたのであった。もちろん、相手も詭弁だということすぐわかるだろうと重々承知も、強引に話を打ち切ったのである。

「あれ?・・・あれ、引越しじゃない?」

十字路を曲がり、アパートが見えるところまで歩いたとき、彩夏が声を上げた。確かに智広が住む小さなアパートの前の道に引越しサービス業のトラックが止まっている。

「ええと、誰かが出て行くという話は聞いてませんね。としますと、どこかの空き部屋に人が入るのではないですか」

「そうなの?それなら、これでリミットは残り1部屋ね。ということとで、とも君達もそろそろ観念したほうがいいんじゃない?」

彩夏がこのように機嫌よく笑うのには理由があった。とある事情が起因して、岡崎智也、愛、努の三人兄弟は両親を相次いで失っている。そして、その事情が原因なのか、それとも単に3人の子供を抱えるのを忌避したのかはわからないが、彼らを積極的受け入れようとする親族はいなかった。

もちろん、智広の親族が悪人達の巢窟というわけではなく、兄弟が申し出たら誰かしら必ず受け入れてくれただろう。しかし、彼らは厄介者になるとわかっていながら、親戚に迷惑をかける気にはなれなかった。それなりの額の遺産があったことも、このことに関係があったといえる。しかし、それでも将来のことと考えて、当時の住居を売り払い、もっと安価な住居を見つけるべきだということ

兄弟は意見が一致した。そして、その際に、彼らの後見人となった藤本恭治が、まあ主に藤本彩夏であるともいえるが、自分の家に住まないかと提案したのである。

藤本恭治の自宅は資産家に相応しい豪邸であり、しかも、早くして妻に死に別れていたため、兄弟の居住スペースは十分にあった。さらに、同じ市内であったため、学校を転校する必要もない。彼らにとってこの上ない好い条件の提案であったはずである。

だが、兄弟はその傍目からみて好意の提案をはね除けた。彼らの両親の死に大きく関わっている藤本恭治の家で暮らすことに対しては、愛と努が猛反対したのである。

そもそも、智広の独断で藤本恭治を彼ら兄弟の後見人にしたという点についてだけでも、努にとっては許せるものではなかった。

智広はときどきこう思うことがある。もし現代日本の制度に嫌疑刑なるものが存在したとしたら、高崎家と藤本家に横たわる溝も幾分か解消されたのではないだろうか。しかし、現実的に疑わしきは罰せずという理念のもと、法の審判は下されず、当事者の一部にしろりを残す結果となった。

そんな中で、彼らが決めた住まいが現在のアパートである。このアパートのオーナーであり、管理人である老夫婦は亡くなった両親の知人であった。彼らは兄弟の身上に同情し、ただ同然のような値段で兄弟に部屋貸してくれている。

それに対して、このアパートの住民がいっぱいになったときにここを離れようと兄弟で決めたのであった。現在は空き室が多々あるからいいものの、入居者がいっぱいになったとき、兄弟が住み着いていることは間違いなく迷惑をかけることになるだろう。

「さすがに安達のおじいちゃん達みたいな善良な人は早々見つからないと思うよ。だから、そのときは是非私の家に来てね。歓迎するわ。今のまんまあの家にお父さんと二人では、もう寂しくて寂しくて」

さきほど、愛と努に嫌われていることを気にしていたにもかかわ

らず、彩夏はそのようなことを口にした。智広はその彩夏の親切に少なからず感謝を覚えたが、一方では自分がこの綺麗な少女の好意に払えるような対価があるのかと冷めた頭で思う。世の中ではなかなか等価交換が働かないもんだなど、思いながら彼女の家を目指して歩いていくのであった。藤本家へ一方的に頼っている現状では、どだい無理なもんだともいえる。

そして、当時の彼らには知るよしもないことであるが、この日に転居してきた一人の少年が岡崎家と藤本家を大きく変えることになる。その者の名は森嶋弘輝といった。

## 第二話 「うん、それは至極残念だね」

寂しさは孤独によってもたらされるものではない。本当の寂しさは、例えばオールナイトで遊び明かした次の日の朝、例えば長く辛い作業が終わった瞬間。そういった中であって、感じるものではないだろうか。それはたとえ人混みの中にいようとも、家族や愛する人がそばにいようとも襲ってくる恐怖であり、胸騒ぎであり、渴きである。

母が父を追うようにして病死してから2年、あれから今に至るまで岡崎智広はそのような何ともいえない感情を抱き続けていた。それは、まるで宇宙の深淵を直視させられているような不安感を彼に与えて、心の落ち着きを妨げていた。しかし、それはあくまで心の中の話であり、表面上であれば智広ほど成熟している高校二年生は珍しいともいえる。少なくとも、この朝の食卓の場において彼に動揺は全く見受けられない。

「・・・ッ！」

食器の音だけが響くダイニング兼リビングの空気に先に耐えられなくなったのは智也の一つ下の妹である岡崎愛であった。

「ん、どうしたの？」

何か言いたいことを我慢しているような様子を見せる妹に対して、智也はごく自然に視線を向けた。

「・・・なんで、わざわざ努を刺激するようなことを言うのよ？」

愛の言葉は今朝も起きた恒例の兄弟喧嘩を指していた。智也は軽く苦笑しながらそれに答えた。

「僕が何を言ったとしても努君は刺激されるんじゃないかな？だから、愛ちゃんが具体的にいけなかったと思うか教えてくれるとうれしいな」

「中三の意識を持て、部活と勉強を両立させろ。挨拶を忘れるな、

人には愛想よく。あとは、たまには私の手伝いをしろ・・・みたい  
なことも言ってたね」

ほとんど一息で言い切った愛を見て、智宏はさらに苦笑をする  
しかなかった。智宏の返答を予測して、予め準備していたのだろう。  
案外自分は安直な人間なのだろうかと思った。

「確かにこう聞かされてみると、人を苛立たせるには十分な言葉達  
だね。でも、やっぱり年長の家族として注意しなければいけないと  
思う。・・・これでも、一応、好意の言葉のつもりだったんだよね」  
なによりそんなきつい口調ではなかったという言葉を口に出すこ  
とはやめておいた。智広としては、できるだけ穏和に保護者として  
の台詞を告げたつもりであつたし、おそらく余所の大人が見たら、  
優しいお兄さんだねと言ってくれただろう。しかし、相手がどう受  
け止めるかわかっていた以上、責められる点は多分にあつたといえ  
る。

「わかつているわよ・・・」

そして、愛も愛で続く言葉を飲み込んだ。

智広にとって家族はわざわざ悪意の言葉をぶつけるほどの存在では  
ないのではないだろうか。そんな風に考えてしまったのである。し  
かし、彼女はそれを直接言う代わりに、次のように言葉を続けた。  
「でも、たとえ悪意がなかったにしても、わざわざ努が朝練に急い  
でいるときに玄関で呼び止めて、ただでさえ嫌っている智広に  
お説教されたんなら、どんな良心から来る言葉でも努が怒ってしま  
うって思わなかった？」

「うーん、タイミングが悪かったことは確かだね。でも僕と努君の  
行動が重なる時間は限られるから。もっと早く起きたのなら良か  
ったんだけど。・・・そういうなら、明日から愛ちゃんが起こして  
くれるというのはどうだろう？」

「絶対に嫌」

「・・・即答するね。兄冥利につきるんだけどなあ。・・・実際に  
は努君が怒ってしまうほど嫌われているとは思わなかったんだよね。

「いきなり、話を戻して真剣な口調で言った智広を見て、愛は心底嫌そうな顔をした。」

「・・・智広、私、そういう冗談は嫌いだから」

そう智広に言い放った愛の言葉は、計らずとも嫌っているはずの彩夏が昨晚使った言葉と似た内容であった。

休み明けの教室に入った智広はさながら転校生のような扱いを受けた。もともと文武両道で綺麗な顔立ちしているため人気があったこともその一因であるのだろう。しかし、一番の理由は仲の良い2年A組の中で唯一春休みの間誰にも顔を見せなかったことにあったといえる。智広は適当に春休み何してたの？というような質問に愛想笑顔を浮かべて答えながら、教室の一角を目指した。すると、そこで二人の学生が智広に声を掛ける。一方の名前は渡辺啓介であり、もう一方は松本絵里であった。

「よう、色男！相変わらず人気じゃん」

「本当にねえ。啓介にも少し分けてあげたいくらいだわ」

「えっ、なんで俺！？普通私にも分けてほしいと違う？俺ってそんな悲惨なんすか！？」

楽しそうに軽い漫才を行う渡辺と松本を見て、智広は相も変わらず仲がいいことだなと思う。彼らは智広にとって比較的仲の良い友人であった。

「相変わらず、仲いいね。それ羨ましいよ」

「うーん、微妙じゃないかな？」

思ったことを正直口にすると、絵里は本当に微妙な顔してみせながらそれに答えた。そして、それに対してまた啓介がにぎやかな声を上げる。

このクラスで流れている噂によると二人は結構前から付き合っているらしいのであるが、そのような噂に疎い方である智広にその真偽

はわからない。もつとも、例え直接本人達からは聞いたことがないにしても、この様子を見れば間違えないんだろうなと智広は思った。「あつ、そういえば、トモ知ってるか？」

智広が彼らの関係について邪推しているのもしらずに、啓介が聞いてくる。その言葉や啓介の表情、今日が始業式であること、そしてなによりも今朝に愛から聞いた情報からその質問は容易に予想できた。

「転校生のこと？名前は森嶋弘輝。ちなみに、かなり格好いい男子らしいよ」

智広が答えると、啓介と絵里が同時に反応する。

「はっ、お前なんで知ってる　っていうか、イケメンいらねえ」

「えっ、嘘嘘っ！キ　タク似とか！？」

二人の声が大きかったせいで、クラスがざわめきだし、情報を聞き出そうと再び智広達の元へ集まりだした。そして、一瞬にしてキタク似という噂が広まる。さすがに松本の言葉を本気で信じている人は少ないと思われるが、どうやら自分がハードルを上げてしまつたらしい。まだ見ぬ転校生に対して、少し罪悪感に覚えた智広であつた。

「・・・というわけで、どれくらいの期間の滞在になるのかわかりませんが、これからよろしくお願いします」

結論から言うと智広の心配は杞憂で終わった。今し方黒板の前で挨拶を終えた森嶋弘輝はタレントまでとは言えなくとも、無駄な期待感で膨れあがつたクラスメイトをガツカリさせないくらいの容姿はもっていたようである。彼の机と椅子は始業式の最中にクラス委員、別名雑用が運び込んでいたようで、一番後ろの窓際というもつとも良い位置を占有していた。智広が座っている場所は一番廊下側の前から3つ目であつたため、彼からかなりの距離を置くことになる。

昨晚の岡崎愛の機嫌から見ても、森嶋弘輝という人間がかなり良い



人となりであることは予測できるだろう。人物を見る目に優れている愛が引越しの挨拶に来た彼のことを気に入ったようであるのだから、それは確かだといえる。

智広はそのような事を考えながら、先ほどの彼以上にクラスメイトから囲まれている森嶋を眺めていると、渡辺が話しかけてきた。

「あいつ、全国区のサッカー選手だつてな。スタメンではなかったらしいが去年は一年生のくせに全国大会に行ったらしいぞ」

彼は今仕入れた情報を律儀に智広に教えた。もっとも彼の真意は智広をからかうことであつたのだが。

「まあ、あれだ。これで、お前の独占時代も終わつたらしいな。もう一人だけで、モテなくなるだろうが、そう残念がるな」

「うん、それは至極残念だね」

智広は適当に相槌を打った。別に強がりとかではなく、彼にとつて本当にどうでも良いことであつた。それは、実際に興味がないというのが主な理由であるが、だいぶ昔から、彼の恋愛相手は藤本彩夏で決まっていたからということも関係する。

自分が、彼女に対してそれほどの愛情を覚えているかと言われるのかと言われると、それも違うのではないかと彼自身は思う。あくまで、相対的に彩夏に対しての評価が高いだけである。

しかし、智広はとりあえずその関係が解消されるまで他に目を向けないことはありえないとも考えている。仮に彼女以上に彼の評価が高い女性が現れたとしても、それで乗り換えるというような行為をしてしまつては交際というものが成り立たないのではないか。彼は臆面もなくそう思っているのである。

・・・このように、恋愛と商売を同一視してしまうという点において、岡崎智広はかなり不器用な人間であるともいえる。

「なんだよ、反応薄いなあ。・・・もしかして本気で怒つたか？」

「いや、ただ単にサッカーがそれほど上手なら努と気が合うかもつて考えただけ」

「あー、それは無理なんじゃねえ？俺が実際に知っている訳ではな

いし、人様の家族悪く言うのは気が引けるけど・・・お前の弟と上手くやっていけるのは愛ちゃんぐらいじゃないの？噂を聞いていたら」

啓介の言うとおり、彼と岡崎努は直接会ったことはないはずであった。どうも努の悪名は広がっているようで、それは智広にとって現在最も頭を悩ましている事項の一つでもある。

智広がそろそろ渡辺との話を切り上げて、下校しようかと考えたそのとき、クラスの時の人である森嶋弘輝が近づいてきた。智広は自分から話しかけるつもりはなかったが、相手から来たのであれば隣人であるし、挨拶すべきであると考えた。

「はじめまして、森嶋君。岡崎智広と言います。おそらく昨晚は妹の愛がお世話になったと思うけど、よろ」

しかし、智広の予想と違い、森嶋はどうも挨拶に来たわけではないようである。

「・・・ッ！あ、いや、森嶋弘輝です。こっちこそよろしく、って・・・！」

そのように慌てて礼を返すと、少し迷った様子を見せる。そして、一瞬間をおいてから、何かを思いついたような様子で囁いた。

「ええ、まあ、なんていうか・・・。そうだな、いや、岡崎君にちよつと恋愛・・・相談？してもいいっすかね？」

「・・・はい？」

その時ばかりはいくら智広でも、言葉の意味をすぐには理解できなかったのであった。

### 第三話 「で、具体的には何したんだ？」

現段階ではまだ可能性論に過ぎないが、森嶋弘輝は希望的観測で将来はスポーツ選手として大成するだろうといわれていた。その彼が運動部のあまり盛んでない京泉高校に転校してきたのには勿論理由がある。彼としては完全にはいえないにしても、ほぼ道を絶たれた形となるのだから当然ともいえた。

彼がもう既に大学やプロが注目しているような成果を残しているのなら違っていたのかもしれない。しかし、それが未来時制にある仮定の話である限り、余程の状況の変化がなければ彼が今後世間から注目を浴びることはないだろう。そして、それら一切、彼が抱える問題の難点が森嶋弘輝個人の努力とは無縁にあるということについて、彼はひどく不満を抱いていた。

アスリートに限らず、物事を成功させるために不可欠な要素が二つある。陳腐といえようが、それは決して覆ることのない絶対条件、才能と時間である。一般に人は前者について注目しやすい。それは当然であるともいえるが、それだけでは要件を満たしているとはいえず、それを開花させるための時間、これを努力と言い換えてもいいかもしれないが、ともかくそれが必要であるだろう。そして、森嶋弘輝の場合、その後者の時間が決定的に足りないと思っていた。

岡崎家。森嶋弘輝は新しい隣人について考えを巡らせてみる。それはひとつの奇跡であったといえよう。母と共にアパートを営営する親戚を頼って越してきた先に、自分とほぼ同じ境遇にある家族が住んでいる確率は如何ほどであろうか？

ましてや、加害者は彼が信じるのと同じ藤本恭治。このことを知って、現状を変えるための考えが彼の頭に浮かんだのであった。

それは、別になんら特別なことではない。むしろ、ひどく抽象的なものであったといえる。

・・・つまり、是非とも隣人の家族を利用できないものだろうかという具体性の欠片もない思惑であった。

しかし、それとは別件ではあるが、クラスに速やかに溶け込むためには如何にするべきだろうかという問題は転校生にとつとはなかなか重要だったりする。数多の方法があると思われるが、その一つとして、そのクラスの中心的人物と仲良くなるということが挙げられる。弘輝自身はこれが始めての転校であったが、別に経験がなくともこの程度の処世術は心得ていた。

そして、その中心人物とは大抵の場合、もっとも悪そうなやつか、もっとも顔のよいやつである。このクラスの中には、特に存在感のある不良は見当たらなかったため、後者を選ぶというのも、自然な選択かもしれない。もっとも、先にも言ったように、それは岡崎智広に近づこうとした副因でしかないわけであるが。

しかし、この状況を鑑みるに、それは己の判断ミスであったのだろうか。

「・・・わりいなあ、転校生。あれ？森嶋君だっけ？いやでもさあ、マジ忠告しておくけど、岡崎と仲良くするのはやめとき？」

「そうそう、窪田の言つとおりだぜ？いや、あいつマジであれ。あれだから。やくざの事務所に出入りしてるつつう噂もあるしよ」

「そ、近づこうとしないのがベスト！」

時は、始業式の翌日の昼休みである。森嶋弘輝は、見知らぬ学生数人に呼び出されて、人気のない廊下にいた。一応友好的な雰囲気を出しようとする彼らなりの努力は見受けられたから、何かされるって訳でもないだろう。しかし、弘輝を囲むように立っている頭の悪そうな4人を見るかぎり、どうやら、彼のクラスにはいなかっただけなのである。この学校自体には不良グループっていうものがきちんと存在しているらしい。

ただ、やはり危険を感じるような存在感はない。外見も言動も酷

く頭が悪そうであつた。

「へー・・・それホント？やっぱ、全然分かんかったな。怖いもんだな」

「だろ？だから、気をつけとけって」

黄木とかいうリーダー格の男が喋ると、ほかの者達がそれに追隨をする。高校に限らず、社会にごくありふれた一般的な風景ではある。

「いやいや、わざわざ有り難うな。まだ、このことよく分かんないから助かった」

今、考えなしに波風立ててもしかないと考えたのか、彼は適当に話を合わせるように応じる。それは警告は受け取ったというポーズであり、それは相手達にも伝わったようだ。

「・・・それじゃ、流石に初っ端から授業フケる訳にいかないから、そろそろ教室戻るよ」

「おう、なんかあつたら言えよ。仲良くしようぜ」

「そうそう、助けてやつから」

例えば、彼が岡崎関係で実際にやくざに襲われたとしよう。そのときにこの学生たちは見て見ぬ振りをせずに助けてくれるのだろうか。そもそも、わざわざ呼び出しての陰口なのだ。彼らが岡崎に対して何か個人的な怨嗟があるとは明白であつたといえる。

そんな表面を誤魔化せる脳さえない彼らに森嶋弘輝は侮蔑にも似た感情を覚えた。その後、弘輝は礼を言つて自分の教室へ向かったが、彼の方はそんな内心を無事誤魔化すことに成功したようである。

しかし、実際のところどうなのであろうかとも弘輝は思う。岡崎智広があいつらのグループから忌み嫌われているということは明白である。しかも、昨日の今日でいきなり弘輝に絡んでくることを考えるとそれも尋常ではないレベルで嫌悪されていることだろう。普通ならば、このような悪目立ちするグループに目を着けられたのな

らば、彼はクラスで孤立していくはずである。他人は誰も自己に面倒ごとを及ぶのを嫌がるものだ。学校のような狭いコミュニティにいるのならば尚更ともいえる。

しかし、見た様子ではそれはあり得ない。となると、あいつらが情けないのか、岡崎が特殊なのか。おそらく、両方なんだろうなと弘輝は思う。それは、彼にとってますます興味深いことであつた。

それにしても、黄木達がさっそく絡んできたのは、昨日弘輝が岡崎と接触したことを知ったことが原因で間違いないだろう。

昨日の始業式のあと、弘輝は智広と一緒に帰宅した。彼らの通う京泉高校から弘輝のアパートまで徒歩25分の近さである。途中までは、渡辺啓介と松本絵里も一緒だったが、彼らは異なる町に住んでいるため、電車を利用する必要があり、既に分かれている。

「・・・それで、恋愛相談って、愛のことかな？」

「ん？・・・ああ、そうそう、彼女って智広の妹だよな？昨日挨拶させて貰った時に凄くいい子だと思つたんだ。まだ会つたばかりで恐縮だけど、彼女のことをいろいろ教えてくれないか」

その名前のせいか、一瞬、反応が遅れてしまったことを軽く悔いながら、弘輝は準備していた言葉で答えた。とつさにしても、つく嘘があるべきだよなと、少し後悔をしていることはもちろん表面には出さない。

ちなみに、弘輝は既に啓介と絵里も含め、下の名前で呼ぶことの了承を得ていた。基本的に下の名前で呼ぶことで、より親近感が増す。最もそれを嫌う人間も存在するが、それに該当するような人は彼らの間にいなかった。

「ああ、自慢の妹だよ。森嶋君がどこまで知っているかわからないけど、僕らの一つ下で、もうすぐ僕達の高校に入学する予定。あと、知る限りでは交際相手はいないみたいだから大丈夫かなと思う。趣味は・・・まあ、家事全般が特技といえるかな？」

「引越しの挨拶のときに、高校1年生だつてことは聞いたけど、そうか、今付き合っている人はいないんだ。・・・ありがとう。」

「いえいえ、どういたしまして。森嶋君のような誠実そうな人だったら、僕も安心はできるよ。でも、心苦しいけど、これ以上僕が手伝えることはほとんどないと思う。勿論、できる限りは協力したいけど、こればかりは当事者同士の問題であると思うからね・・・」  
「いや、問題ない。こういうものに対して人を頼るのも格好悪いしそれよりも、せっかくの隣人でクラスメイトだ。智広にも仲良くしてもらえると嬉しい」

岡崎愛が彼氏もちではないことについては、少々以外ではあったが、信頼をまず勝ち取らなければならぬ彼とってそれは好都合であるといえる。もっとも、何処まで深入りしてよいかという判断はこの時点で彼自身もできていなかった。

しかし、本当は恋愛感情なんて持たない愛を、話題づくりのために利用したことに関し、森嶋弘輝に特に罪悪感は無かった。

人が社会で生きるためには、このような小さな嘘を積み上げなければいけない。それによってのみ、自己というものが形成されると彼は信じていたのである。そして、嘘で塗り固めることによって自分の像を作り上げているのは、何も彼だけではないと思っている。だが、嘘を繰り返していることについて、それを意識している人は案外少ないのではないかと思う。

人は誰も自分は善良で正直であると信じてしまうものである。そういう意味では、弘輝は自分で自分が特殊だと言うことを認識している。そして、彼はこう考えるのと同時に直感もしていた。

「それは、もちろん。こちらからお願いたいくらいだよ。これから妹、そしてもう一人弟もいるけど、家族ともどもよろしくね」

そう言って、手を差し出してきた智広も自分と同じタイプの人間であることを。

登校二日目の帰り道、すこし、迷った挙句様子を見せながら、弘輝は聞いてみた。

「なあ、智広ってなんかF組の黄木達のグループに睨まれてるの？」

「あー、その話ね？有名、有名。ともっち、話しちゃっていい？」

質問に答えたのは岡崎本人ではなく、一緒に歩いていた松本絵里である。特別に可愛さという点では、学内でも一、二番と評判の彼女であるが、非常に気さくな性格で、姉御肌でもある。当然、男女を問わずその人気は非常に高かった。そのため、彼氏格と目されている渡辺啓介は、クラスメイトのやつかみなどといったその恵まれた境遇に見合う苦勞を普段から強いられていた。

「・・・あんまり人に聞かせられるような話じゃないけどね」

岡崎智広はすこし複雑そうな顔でいいよと許可を与える。

「私ともっちって去年も同じクラスだったんだよね。啓介は違っただけ、あいつらも一緒のクラスだったの」

そんな感じに話し始めた松本の話によると、黄木たちはグループを形成して、集団で他の生徒に対していじめに近いことをずつと行っていたらしい。特に体の弱かった一人の生徒が重点的に狙われていたという。

「で、ある日ある場所、黄木が、えっと、そうね、乙女が口にしてはいけないようなこと言っただんだよね。それで、我らがともっちと岡崎君が断固許さんと」

「いや、違っただろ？あれは、たしか仲沢が・・・えっと？」

話たがりのくせに、要領を得ない絵里の言葉に、啓介が訂正を加えようとしたが、やはり後が続かなかった。これによって弘輝は頭が悪い子だなという失礼な感想を持つにいたる。

「なーに？あんだだって、覚えてないじゃん？なのに、えっらそーに」

「うっせー！・・・トモ、なんだっけ？」

そこで、困った彼はその張本人に話を振る。そんな、キラーパスに対して、半ばあきれながらも智広が仕方ないといった様が続けた。「もしそれを言われたのが俺だったら、耐えられない。とつくに自



殺しているところだ・・・そんな感じの言葉だったよ」

「あ、思い出した。そうそう、それで近くにいたお前が仲沢に向かつて、『それって、暗に黄木が言ったことは酷すぎて、あり得ないことだと思ってるってことか？』ってことで、あんたら実は仲悪い？』って聞いたんだよな。まあ、すっげえ挑発だったな」

「うーん、僕としては素直な疑問のつもりだったけどね。そう思われてもしょうがないかな？・・・でも、額面通り受け取れば、そういうことになるんじゃないかなと思うんだけど」

あと、僕はそんな言葉づかいをしていない、と啓介に対して智広は文句を言った。どうも、智広の周りには、彼の言葉を悪く言い直したい人が多いと、彼は日頃不満を抱いていた。もともと、智広を知る人から言わせれば、彼の慇懃無礼な言葉は、下手な悪口雑言よりもかえって強い悪意を与えるということらしい。

「なるほど、それで、睨まれてるのか。・・・だけど、それって平気か？」

「あ、それは大丈夫、大丈夫。だって、ともっち、すっごい黒いから。もう墨で塗りたくったぐらい。実際、あんな奴じゃどうこうできないから」

「・・・それ、ひどいよね？絶対、ひどいよね？」

松本絵里の言葉に、智広が傷ついたよというようにおどけて見せる。

「でも、絵里ちゃんの言うとおり、実際大丈夫だと思うよ。彼らだって何か決心があって苛めをしているわけではないから」

苛めの本質について、世間は強く関心を示しているにもかかわらず、あまりにもそれを誤解しているといえる。ドラマなどで多くあるような深い憎悪によるいじめというものは実際にはほとんど存在しない。現在社会の学校のような希薄な人間関係においてはそこまで深い感情が発生するようなこと事態があまりないのである。

その多くが、ただ暇つぶしや娯楽の一環としてやっているだけであるのだ。そして、それは、自己保身という計算に基づいて行われ

ている。つまり、誰もが殴り返されるという覚悟の元に行動していない。ゆえに、苛めをする側に、この行為は身を滅ぼすぞということをしめれば事は解決する。

「・・・で、具体的には何したんだ？」

彼の言葉を聞いて、森嶋は興味深そうに聞いてみた。

「黄木グループ全員をその唸る拳で沈めちゃったんだよね？」

「トモの手下のヤッサンが、あいつ等ん家を取り囲んだって聞いたぞ？」

「・・・いや、それ嘘だから。しかも、それ流したのって啓介と絵里ちゃんでしょ？」

まるで予想していたかのようなタイミングで、智広は一斉に声を上げる渡辺啓介と松本絵里に対して突っ込んだ。もともと、実はその虚構はかなりの程度において真実に近いものでもあり、それに関しては当事者以外知る由もない。

「そんな、大それたことがあるわけないよ。ただ、先生にお願いしただけ。一般にチクったって言うのかな？彼らはああ見えていて実は結構真面目なんだ。退学って言う言葉を一端に気にしていたから」

「・・・それだけで？」

森嶋は少し腑に落ちないようであった。無理もない。教師に頼って簡単に解決するものなら、そもそも社会問題とはならないだろう。

「まあ、こいつ天才児だからな。この前の全国模試でトーダイがA判定だぜ？しかも順位が二桁。学校内でも特別扱いなのも当然さ。

トモが教師に集中して勉強できないですーって言えば、あいつら血相変えて対処に乗り出すぜ？」

「へえー、智広ってそんなに頭いいのか？」

「・・・やめてほしいな。そんな、たかが成績の良し悪しで頭云々っていうのは・・・。そんなもの勉強をすれば誰だってできるようになるよ。第一、1年生のころの判定なんて、まったく意味をなさないって」

智広が少し照れたように謙遜すると、絵里から悲鳴があがった。

「え、そういうもんなの!? 私、行きたいとこのB判とって喜んでたのに……」

「いや、絵里程度が何言っただか……」

そう絵里を馬鹿にする啓介は啓介で、結構成績がよかったりもする。

「それ……激しくむかつく。なにか……そこはかたく殺意を覚えるわ……」

そして、絵里はぶつぶつと、ともっちならともかく、啓介ごときになどと呟いていた。

その様子はさながら年齢制限付きホラー映画の様相を呈している。

そんな彼女とそれに怯えて智広の後ろに隠れている風を装っている啓介を、弘輝は面白そうに観察している。

ぶつちやけた話、まるで、ラブコメディ映画の登場人物みたいなステレオタイプなカップルだと思ったのだ。

「あつ、もうこんなとこね。それっじゃ、私たちこっちだから。ともっち、今年もテスト前はお願ひするわ。弘輝君も、また明日ね! ほら、啓介、アンタ覚悟しなさいよ」

「は、はいっ!? そ、それじゃ、また明日な……って服がのびるから引つ張るな」

やはり、漫才を繰り広げている啓介と絵里に対して、智広と弘輝も挨拶を返して彼らと別れた。そして、そのまま、岡崎達の住むアパートを目指して歩いていく。そして、途中の交差点で、突然智広は立ち止まった。

「そういえば、もしよかったら、親睦もかねて今夜僕の家で夕飯を食べていけない? 森島君達の歓迎会も兼ねて。妹が作るものだから味の保障はできないが、良かったらお母さんも誘ったらどうだろうか?」

「あ、ああ。それは有難とう。まあ、母さんはともかく、俺は今のところはまだ暇だから是非参加させてもらっよ。……ところで、行かないのか?」

「うん、これからアルバイトがあるんだ。時間もないし、直接行くかなと思っていて」

「バイト？」

一緒に立ち止まっていた森嶋がその言葉に反応する

「俺もちょうど探していたんだが、そこは今ほかに求人を出してないか？」

「あー、ごめん。僕も社長さんと個人的な関係で働かせてもらっているに過ぎないから。ちよつと、なんとも言いようがないね。あと、ちよつと仕事が特殊だし」

「特殊な仕事って？・・・あつ、悪い時間ないんだったよな？」

「いや、まだ大丈夫だから気にしないでいいよ。それじゃあ、また夜にね」

「ああ、楽しみにしてる」

そう挨拶を交わしてから、岡崎智広は歩いていった。それを遠めに見ながら、弘輝はある違和感を覚えていた。自分が智広にやたら接触するのはそれなりの理由がある。しかし、例えばクラスメイトで隣人だからといって、まだ知って間もない人間の歓迎会なんて計画するものだろうか。

まあ、いずれにしろ向こうが有効的に接してくれるのならば問題はないはずである。非常に切れる人間みtaiであるし、ある程度仲良くなつてから話を切り出そう。森嶋弘輝はそう考えたのだった。

#### 第四話 「・・・それは十分、何かを企んでいるっていうのよ?」

「・・・人間に限らず、同じ種類の間の生き物って、その個体差は僅かだと思ふの。どれほど優秀なアスリートでもウサギよりも速く走ることはいないし、どんな運動が苦手な人でも、亀よりは速く歩けるでしょ?だから、ほぼ同一のDNAによって構成された人間に本質的な違いはないと思う」

「・・・特に、高度に発展した共同体社会に生きる今日の人々にとって、その体の差のほとんどは問題視されなくなってきたって現実があるじゃない?これこそが、文明の進化の証拠だし、人間が万物の長に位置づけられる由縁でもあるんじゃないかな?」

「・・・そんなこともあって、自分の責任ではないそんな僅かな先天的個体差だけで、尊重されるべき個人が差別されることがあつてはいけないと思うの。このことに気づいたという点だけをもつても、私は自分が人間であることに對して強く誇りに思うわ」

「・・・そう、だから問題はほとんど解決されているの。現実的にはともかく、観念的に人間の身体上の違いについてはそのほとんどを無条件で受け入れなければいけないって意識と、あと、その違いがその人の障害となる時には、その人のために便宜を図ってやらなければならぬという意識は、もう既に大部分の人が共有していると思うわけなんだよね」

「・・・小学校の初等教育を見て。今時、足の遅い生徒を教師が馬鹿にしたらどう思う?ちょっと悪い容貌の子供を蔑視する先生がいたらどう思う?そんなことは許しちゃ駄目って思わない?」

「・・・だけど、そんなほとんど完成された社会規範にもまだ不十分なところが残っているんだよね。それが、頭の良さに対する差別なんだと思う。そう、社会と文明の進歩の中で、頭の良さについての個体差への認識だけは改善できなかったといえるんじゃないかな?それってひどくないかな?特に最近、むしろ高度学歴社会化し

ていて、時代を逆行しているとすら言えるのではない？」

「・・・だから、私は今ここに訴えたいわ。そんな、無理に体制的な教育システムに子供を組み込むことはやめて、むしろ私のようなできの悪い子に関しては、ポジティブアクションをして、優秀な人と同じ扱いをするべきじゃないかしら？」

「・・・というわけで、とも君はもって配慮するべきじゃないかなと思うわけなの。」

「・・・僕は、勉強をサボるための口実としては、あまりにも大袈裟だと思っわけなんですが？」

延々と続いた藤本彩夏の講義を聞き終えて、岡崎智広は呆れ果てたように答えた。

時計は夕方4時を指している。二人は、現在彩夏の部屋で、椅子を並べて座っていた。薄い青の色調で統一された部屋はよく整頓されており、清潔感に満ちている。ここで、智広は家族にも教えていないもう一つのアルバイトを月に数回の割合でやっていた。

「だって、とも君が無茶言っんだもん。こんなの無理に決まってるじゃない」

そう言って、彩夏は手に持っていたA4の紙をひらひらと振ってみせた。その用紙には、学習計画表と題が打っており、細かく予定を書き込んだ表がプリントされている。

「そもそも、基礎がわからないのにこんな応用問題なんて無理だよ。ワイ、ニード、ユトリ」

「いえ、でも、一通り塾で習っているはずでしょう？彩夏さんは去年の夏から通っていたじゃないですか？浪人生には標準的だと思うれる難易度と量を選んだつもりなんですが・・・」

「無理なものは無理なの！それに私は5カ年計画だから、もっと、ゆっくりやっても大丈夫なんだよ？今は焦らず、一年生の復習から始めようよ？」

彩夏は智広の二つ上で、去年高校3年生であつたが、受験で見事に全滅してしまったという。そこで、娘の成績に不安を覚えた藤本恭治は、智広にその勉強の監督を依頼したのだ。ゆえに、彩夏と自分の印象のためにも、このアルバイトは公言できなかった。

「いや、普通に今年中の合格を目指しませんか？」

「・・・うんとね、嫌なんだよ。とも君に丁寧話を話されるのも、君つてお願いしても先輩である限り、敬語使うのやめないじゃない？だから、もう同期で合格して、彩夏とか呼ばれて、一緒にキヤンパスを楽しも？・・・それだったら、2浪が丁度いいの！」

顔を赤くして、少し照れたように彩夏がそう口にする。もつとも、彼女には、惚気ることによって、誤魔化すという狙いもあつたが。

しかし、実際、恋人からの言葉に、智広は引っかけかけた。普段冷静だと思われている智広が実はこのようなストレートな言葉には弱かつたのである。しかし、それは彩夏も実は同様で、そういう意味では似たもののカップルといえた。

「・・・えっ？・・・困りましたね。そんなこと言われまして、僕としてはこれ以上何も言えないじゃないですか。僕だつて通えるものなら彩夏さんと一緒に・・・って一緒に？」

「そう！とも君と同じ所に通うんだ。ね、とも君はいい考えだと思わない？だから、ゆつくりとしたペースでやろうよ。大丈夫、私も2年もかければ大丈夫だから」

自信満々で彩夏は答えた。およそ勝利を確信しているのであろう。  
「・・・彩夏さんが去年受験した大学つてどこか教えてもらえますか？」

しかし、一方の智広は何か気づいたのか、彩夏に対して質問をした。それに対して、彩夏がいくつかの大学の名前を挙げる。それを聞くと、智広は少し考え込んだ。

「・・・」

「フフフ」

「・・・」

「フフ・・・ふ？」

「・・・あ、あれ??」

「・・・とりあえず、問題量を二倍にしましょうか。期限も夏休み前からゴールデンウィーク終了までに変更します」

「えっ!? なんでなんで??」

思いがけない智広の言葉に、彩夏は大きな声を上げた。まったく、彼はさっきまで彩夏の意見に賛同しかけていたわけではなかったのか。

「彩夏さん、僕の志望校を思い出してください」

「・・・あ」

「やっぱなしつて言うのは駄目ですよ？僕も、今のでモチベーションがかなり上がりましたから。・・・さあ、一緒に頑張りましょう」  
そういと、智広はニヤリと笑った。

「あ、あはは・・・」

それに対する彩夏の笑い声はかなり枯れていて、そして、かなり機嫌の良い様子で、一人ぶつぶつ呟きながら計画表を書き変え始める智広を力なく眺めているのだった。

その後は、彩夏も観念したのか、90分間ほど二人は特に話すこともなく、真面目に机に向かっていた。・・・浪人生の彩夏と高校2年生になったばかりの智広が同じ教材を解いていて、なおかつ、わからないところを智広が説明しているという点のご愛嬌であるが、  
「・・・とも君は、今日は夕飯も食べていく？」

さすがに集中力が切れたのか、彩夏が聞いてくる。智広が藤本家を訪れる時は、大抵夕食までご馳走になっていた。というのも、家主である藤本恭治がほとんど家に帰ってこないからだ。

「すみません、少し予定がありますので、今日は帰りますよ。ほら、家の隣に引っ越してきた人がいたじゃないですか？その家の子供が同じ京泉高校で、偶然同じクラスだったんです」



彩夏の質問に対して、智広は体の向きを変えて説明をした。が、それを遮るかのように、低めの声で彩夏が短く言葉を挟みこむ。

「性別は？」

「えっ？」

「だから、その漫画の登場人物のような人は女の子？男の子？かわいいの？」

「・・・男性ですよ」

「そう。ならいいわ」

その答えで聞いて、彼女は表情を少し和らげた。その彩夏の嫉妬というには少し控えめであるが、そのような要素が含まれていると思われる様子に、智広は少し嬉しくなる。

「それで、その人の歓迎会も兼ねた晩餐会を行うことになりましたので・・・」

「歓迎会？・・・それは愛ちゃんが言い出したの？」

「いえ、僕が申し出たんです」

「・・・それって、とも君・・・なにを企んでいるの？」

訝しそうな彩夏をみて、智広はなんとも言えないような表情で、少し自虐的に笑った。

「いえ、僕の方には特に何もありませんよ。ただ、どうも向こうの方に何かあるみたいですので、そこで、はっきりさせるための、機会を設けられたらと思ひまして・・・。少し不気味でしてね」

「・・・もう。それは十分、何かを企んでいるっていうのよ？」

彩夏が少し苦笑いを浮かべて感想を述べる。でも、特に面倒そうな事柄でなくて、少し安心したようでもある。それも、自分の交際相手が何かと厄介なことを涼しい顔で処理してしまうような人間だという認識があったからだ

「へえ・・・でも、愛ちゃんが用意するんでしょ？それって、すごいよね。ちよっと前まではまったく料理ができ・・・って、どうしたの？」

彼女が話を止めたのは、急に智広が手で頭を覆ったからだ。

「・・・忘れてた」

「？」

「いえ、愛に今日のことを伝えるのを忘れていました」

「ふうん。・・・なら、今教えてあげたらいいじゃない。まだ4時ぐらいだよ？」

「あー、それが今日あいつ友達と外出するって言っていました、多分6、7時にならないと帰ってこないと思います。まあ、というわけで仕方がないですから、その森嶋君に連絡して、今日は中止だつてことを伝えておきましょう」

そして、智広は立ち上がって、お電話を借り手もいいですかと彩夏に問いかけた。そんな彼に対して、彩夏と一緒に立ち上がりながら、提案をする。

「そうなの？じゃあ、うちでその歓迎会をやらない？」

「え？」

「あー、でも愛ちゃんならともかく、努君は来てくれないかな？」

彼女も少し自虐的に笑うと、テヘといった感じに舌を出した。

「いえ、そんなことは・・・あつ、でも、そうだな・・・」

一方、智広のほうは、思いつくことがあつたようで、少しの間、考え込む。森嶋弘輝の情報を思い出してみた。しかし、彩夏はそんな彼を見て少し勘違いをしたようだった。

「・・・うん。でも、まあ、これこそ仕方がないことだと思うわ」

「・・・あつ、いえ、そう意味ではないです。そうですね、これは逆にチャンスかもしれないです。少し考えがありますので、食事会の方、お願いできないでしょうか」

「えっ、それは全然・・・構わない・・・けど？」

「よろしくお願いします。それでは、申し訳ないですが、電話を貸して貰えないでしょうか？」

「う、うん」

そして自分の携帯を持っていない智広は、この時間誰もいないはずの自宅に電話をかけるために、彼女の部屋を出ていった。・・・

未だ、事情を飲み込めない彩夏を部屋に残して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1963f/>

---

嫌疑刑の量刑判断

2010年10月28日05時01分発行